

京都教区の皆さまへ

2025年聖年「希望の巡礼者」を迎えるにあたって

カトリック京都司教
パウロ 大塚喜直

■ 聖年（ジュビリー・イヤー）の恵み

カトリックの聖年の起源は、旧約聖書レビ記第25章の「ヨベルの年」にあり、ユダヤ教で50年ごとに土地返還や奴隷解放が行われる特別な年でした。カトリック教会では、この精神を受け継ぎ、1300年に教皇ボニファティウス8世が最初の聖年を制定しました。その後、すべての年代の人が生涯に一回でも聖年を体験できるようにと、聖年は25年ごとに祝われるようになり、信者にとって特別な恵みの時期とされています。

聖年は本来、回心を促すための期間です。教会は聖年を通じて、罪のゆるしにともなう償いの免除である「免償」を豊かに提供してきました。一定条件を満たすことで全免償を受けられ、巡礼や祈りを通じて信仰を深めることができます。教会全体で祝われる聖年は、信者同士の絆を強め、一致を促進する機会にもなります。

■ 2025年の聖年公布の大勅書

教皇フランシスコは来る2025年の通常聖年のメッセージを「希望の巡礼者」とし、2024年5月9日に聖年公布の大勅書を発表しました。パウロのローマの信徒への手紙にある「希望はわたしたちを欺くことはありません」（ローマ5・5）という一文で始まる冒頭で、教皇は次のように述べています。「希望のしるしにおいて、使徒パウロは希望のしるしの名のもとに、ローマのキリスト教共同体に励ましを与えます。・・・わたしは聖年を過ごすためにローマを訪れる人たちと、使徒ペトロとパウロの町に行くことがかなわずとも部分教会において聖年を祝う人たち、そうしたすべての希望の巡礼者のことを思います。すべての人にとって聖年が、救いの『門』である主イエス（ヨハネ10・7、9参照）との、生き生きとした個人的な出会いの時となりますように。教会は、主イエスを『わたしたちの希望』（1テモテ1・1）として、いつでも、どこでも、すべての人へのべ伝える使命を持っています。」教皇は信者が神の愛と希望を再確認し、受刑者には希望を、病者には慰めを、青少年には支えを、難民・移民には安全と教育の機会を、高齢者には他世代との絆や理解を、そして貧しい人々への関心を高めるきっかけとなることを期待しています。

■ 希望のしるし

聖年のロゴの四人の人物は、地球の四方から集まってきた全人類を表現しています。4人が抱き合う姿は、すべての民を結びつける連帯と友愛を示しています。先頭の人物は十字架、すなわちキリストをつかんでいます。4人の足元には人生の旅に立ち向かう困難の波が押し寄せていますが、長く伸びた十字架が希望のシンボルである「^{いかり}錨」となり、信仰の旅を続ける巡礼者を支えています。

教皇は、聖年を「時代のしるし」を読み取る機会としつつ、わたしたちが悪と暴力に負けたと思わずに、今日の世界にある善に目を向けようと促しています。そのため、「時代のしるし」を「希望のしるし」に変え、神の救いを求める心の願望を抱えながら進むよう呼びかけています。

教皇は、戦争や紛争が終結し、平和がもたらされ、お金を武器の調達や戦費に費やさず、飢餓をなくすための世界基金のために使うことを提案し、同時に、債務の返済が不可能な貧しい国々への債務帳消しを呼びかけています。そして、「わたしたちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなもの」（ヘブライ6・19）という言葉を示しつつ、わたしたちに贈られた希望を決して失わず、神の中に拠り所を見いだしながら、それをしっかり保つように励ましています。

■ 聖年の開幕と「聖なる扉」（ポルタ・サンタ）

聖年には、巡礼者がローマの教皇直属四大聖堂を訪れ、通常は閉じられているが聖年にのみ開かれる「聖なる扉」を通る伝統があります。これは、イエス・キリストが神との交わりの門であり、御父への「道・真理・いのち」であるという教えから来ています。聖年に「聖なる扉」を通る巡礼者は、新しいいのちを生きるために「イエス・キリストは主である」と告白し、罪のゆるしを思い起こします。

2024年12月24日（火）主の降誕の前日、聖ペトロ大聖堂の「聖なる扉」が教皇によって開かれ、聖年が開幕します。次いで、2024年12月29日（日）聖家族の祝日に、ラテランの聖ヨハネ大聖堂で聖なる扉が開かれます。

京都教区では同日、大勅書の指示にしたがって、司教座聖堂である河原町教会で司教が聖年開幕のミサを捧げます。2025年1月1日（水）神の母聖マリアの祝日に聖マリア大聖堂、1月5日（日）主の公現の日に城外の聖パウロ大聖堂の「聖なる扉」がそれぞれ開かれます。

閉幕については、聖ペトロ大聖堂を除く3つの大聖堂の「聖なる扉」が2025年12月28日（日）に閉じられ、この日に部分教会においては聖年が終了します。次いで、2026年1月6日（火）主の公現の日、聖ペトロ大聖堂の「聖なる扉」が閉じられ、2025年の聖年は閉幕します。

■ 京都教区の巡礼地

巡礼は聖年における基本的要素であり、教皇は来たる聖年においても「希望の巡礼者たち」が伝統的な、あるいは今日的な巡礼を通して、聖年を体験することを願っておられます。

京都教区の巡礼地は、京都司教座聖堂である「河原町教会」、「宮津教会堂」、「福知山教会」、「奈良教会」、「大津教会」、「鈴鹿教会」、「四日市教会」とします。

病気や高齢で巡礼が難しい人は、聖体拝領やミサ、共同体の祈りに実際に参加するか、テレビやラジオを通して参加することで、聖年の免償を受けることができます。

■ 免償

わたしたちは人間的な弱さから罪を犯し、神への道から離れることがあります。神のあわれみは、罪のゆるしとして注がれます。罪のゆるしは、通常「ゆるしの秘跡」を通して与えられますが、罪の傷跡が取り除かれるために、司祭が奨める特定の祈りや善業といった「償い」が必要です。免償とは償いを免除するもので、罪のゆるしではありませんので留意してください。

一般に免償を得るためには、大きな罪のない、神と一致した心で免償を受けたいという意志をもって巡礼を行い、ゆるしの秘跡を受け、ミサに参加し、信仰宣言を唱え、教皇の意向や教会、世界の善を願って祈ります。免償は、自分のためだけでなく、代願の形式でいつでも死者に譲ることができます。この代願は、この世を去った人々への愛のわざとして奨められています。

■ むすび

2025年の聖年に向けて、教皇フランシスコは「希望の巡礼者」として歩むよう呼びかけています。京都教区のわたしたちも、信仰と希望を新たにし、神の愛を体験するこの機会に、個人においても、教会共同体においても、困難な時代であるからこそ希望を持ち、過去の過ちをゆるし合い、シノドスの精神でもって互いに支えながら、新しい一歩を踏み出す勇気と力をいただきましょう。

なお、詳細については、カトリック中央協議会や京都教区の公式サイトをご覧ください。